

## 静岡県現地支援調整本部派遣者（第8次隊員）

所 属 市立図書館  
職・氏名 主任 金子 大介

任務7日目、大槌小学校校舎の中。1階の義援金申請会場にいる私。

小学校のグラウンドは津波で全壊した大槌町役場の仮設庁舎が建てられている。校舎1階、2階は津波を受け、3階、4階は津波後の火災で黒く焼け焦げている。壁、一部の扉を残して、骨組みだけは残っている。机、椅子は無くなり、窓のガラスは割れたまま。雨風を防ぐためにブルーシートで覆われた1階の壊れた壁。「立ち入り禁止」の黄色いテープが張られた教室の扉。割れた窓の外を見ると、一面茶色の世界。重機の音が止むことなく耳に入ってくる。校舎正面玄関には花とお菓子が手向けられている。校舎内に今なお降り注ぐ粉塵。マスク無しではいられない。仮設庁舎の方から引かれた電源、コードリール。暗い会場には、夜間の工事現場でよく見かけるライトが一機、灯る。電圧が低く、コピー機は数日前に故障した。代わりに家庭用プリンタ2台のコピー機能をコピー機代わりに使用。破れかけた案内掲示。ダンボールを切って作られた整理券。その整理券を持ち、じっと静かに順番を待つ大槌町の被災者たち。ここが7日目の私の仕事場、任務を全うする場所。

今日と明日5月20日午前中に第9次隊への引き継ぎをもって、私の任務は終了する。担当した支援業務はいわゆるコピー係だ。申請記載台5席に座る岩手県職5名の後方に立ち、黙って「コピーお願いします」の言葉を待つ。1件につき罹災証明書1部、通帳の表面と、表面1枚をめくった裏面を各2部、計5枚の写しをとる。前日の反省から、「コピー待ち」がたまり被災者を待たせてしまうことがあった為、記載台の後ろの床に持参したガムテープを貼り、1～5までの番号をふり、1～5の番号が書かれたクリアファイルを用意した。これで誤って別の方に写しを渡すことは無くなった。遠野市の100円ショップで買ったクリップが、少しの風で舞ってしまう罹災証明書をしっかり押さえてくれていた。それでもたまってしまうコピー待ちの罹災証明書と通帳。ひたいに垂れる汗をタオルで拭う。待たせてしまった時には、写しを渡す時に「大変お待たせいたしました」と一言と一礼を必ず添えた。預かる通帳の中には海水に浸かり、よれよれになってしまったものも多い。

出発式で市長から貸与された「沼津市」「静岡県」と大きく書かれたオレンジ色のビブスを着用し、定位置に立ち申請開始の合図を待つ。大きくつまづき、数年前には休職までし迷惑をかけてしまったそんな私がいま被災地で任務を行っている。私が元気になるまで支え続け、被災地へ送りだしてくれた先輩、仲間、姉の顔が目には浮かぶ。7日間着続けたこのビブスが、工事用のライトで照らされ暗い会場の中でもよく目立つ。順番を待つ被災者の方々が私を見ている。そして私には大槌町の人達の疲れきった顔が見える。大切な人を失ってしまった多くの人達が目の前にいる…。こみ上げてくる感情、7日目にしても抑えられなくなってしまった。溢れる涙を柱の陰に隠れて、汚れたタオルで拭く。照明も暗いし、メガネもかけているし、マスクもしているから、誰にも私のみっともない顔を悟られずに済むだろう。目の前が涙で霞みながらコピーを取り続けた。これが私の任務7日目だ。

毎朝6時起床。大槌町の隣、内陸部にある遠野市の浄化センターを本部、宿舎とし、静岡県災害支援車両に乗って約1時間かけて被災地の大槌町へ向かう。夕方5時、任務を終えて遠野へ帰る。任務が長引き、夜9時過ぎに帰ってくる仲間もいた。

私の所属は大槌班、班員は8名。遠野市本部、宿舎にはその他に遠野市班3名、本部詰め2名、指揮班2名の計15名での共同生活。自ら立候補して来た人、上司命令で来た人、事情は様々であるが、隊員全員、想いは一つ、「被災地支援のため」のただその一言だった。

私の所属した大槌班は、県職3名、市職5名で構成されていた。皆それぞれに個性があるも、支援活動を共にしていくうちに、お互いを尊重しあえる仲間となっていく。この悲惨な被災地の現状を目前にしたら、県職、市職といった肩書きなど無用なものであるとさえ感じた。

任務初日から5日間は、津波や火災で失くした国民健康保険証等の再交付業務に従事させて頂いた。役場の町民課の職員お二人と静岡市代表の方と私の計4名で行動を共にし、保険証を載せた岩手県九戸村から大槌町に譲渡された公用ワゴン車に乗って、避難所や集会所を回る。町役場の職員のお二人も被災者。仮設住宅待ちで避難生活をしている。一人は私と同世代の男性職員さん（仮名 山岡さん）、もう一人は50代の女性、元看護師の非常勤職員（仮名 山下さん）、静岡市代表の方は私より年下だが、自分の考えをしっかりと持ち、一本筋の通った好青年（仮名 松村さん）である。

任務初日は大ケ口（おがくち）という地区の多目的集会所。避難所になっている。午前中は第7陣の静岡県派遣隊員から国保証の再交付業務について引き継ぎを受けた。第7陣の隊員は静岡に向けて出立していった。第8陣隊員としての私の任務がここからスタートした。避難者が送迎バスに乗って風呂から帰ってくる。再交付業務の際に持参するパソコンが2台置かれた長机の横の壁には大槌町職員の電話連絡網が貼られている。横線が一本引かれた職員の名前が多く見える。町長の名前にも横線が引かれている。津波で亡くなられた方々だ。

業務4日目。10年程前の廃館となった「浪板児童館」が会場。これまでの4日間で一番来場者が少ない。小さな集落だからだろうか。お昼頃になり山岡さんから「実はお伝えしなくてはならないことがあります…」「ここは津波で亡くなられた方々の遺体安置所でした…すみません」と告げられた。震災後は遺体を安置する場所の確保さえ困難だったのだろうと思った。「マッチでなくライターでごめんなさい」と一言添えて、私は持参していた線香をあげさせてもらった。途中で消えてしまった線香に気づき、再び火をつけてくれた山下さんと山岡さん。静けさと漂う線香の香りの中、今回の津波でおこった大槌町の惨劇をお二人が語ってくれる。

初日の任務から5日間。「せっかく静岡から来て下さったのですから」と任務終了後、被害の大きかった地域を迂回しながら、その惨劇を説明してくれた。「ここは以前、きれいな砂浜が広がっていたんですが…」地盤沈下の影響で松林の根元あたりまで海岸線がきている。海水に浸る大槌港。破壊された鉄橋。岸壁に引っかかって斜めに寄り掛かった家屋。目に飛び込んでくるのは信じられないものばかりだが、これが現実だ。

今回の津波は三重苦、いや四重苦だったのだろうか。山岡さん、山下さんが語ってくれた話や、他の隊員が被災者の方々から聞いた話では、地震の揺れ自体で家屋が倒壊したり、亡くなられた方はほとんどいなかったという。第一波の津波では生きのびた方も多かったが、第一波で街や川に溜まった

海水を大きな第二波の津波が押し流し、街を破壊していったという。ガスタンクがバンバンと爆発していく。次は火災。第一、二波を受けながらろうじて助かった人の命を炎が奪っていく。

人が乗った車が津波に飲み込まれていくのを横目で見ながら必死に走って逃げた方。一度は津波で流されるも運よく他人の家屋の2階につかまり生き延びたが、濡れた体に3月の寒さが襲い掛かる。他人の家屋の中から毛布を探し出し、寒さに耐えること一夜、二夜が過ぎ、救助されて助かった方。一度は津波に流されて、油とヘドロの混じった海水を飲むも助かった方の体には疱疹が出ていた…、医師もいなく治療してもらえない。

山岡さんは地震発生時、町役場の一階で勤務中だった。地震の対応に追われていたが、ギリギリの所で避難、津波に追いかけられながら、自転車を必死にこいで間一髪逃げ切ったとのこと。元看護師の山下さんの自宅は、2階は無事だったものの1階は津波を受けてしまった。自宅がサケ、マスなどの孵化場の近くにあったため、1階は魚の死骸でいっぱいになっていたとのこと。残された魚の腐敗臭が強烈に残りとても住める状態ではなく、今は妹さんの家で避難生活をしている。そういえば大槌港近く、魚加工場が多くあった地域を車で通ると、2ヶ月経った今もなお強烈な腐敗臭がしていた。

私が被災地の大槌町で聞いてしまった惨劇…記憶できないほど、沢山聞いてしまった。「悲鳴…泣き叫ぶ子どもの声。津波に飲み込まれていく大槌町を映した8分間の悲しい映像…」これを見てしまった大槌班の仲間の隊員の表情…。

大槌町最後の任務8日目。早朝、第9陣隊のバスが遠野市本部に到着。山田町班の沼津市代表の榊原さんと固い握手を交わした。午前中に第9陣隊大槌班への引き継ぎも終わり、最後、お世話になった方々へ挨拶に回った。仮設庁舎内、町民課と福祉課を訪ねる。皆さん忙しいので挨拶は30秒で済ませた。国保証再交付で一緒に町内を回った山下さんはお休みの日。きっと久しぶりのお休みだったことだろう。私は山下さんの分まで山岡さんと両手でグッと握手を交わした。

昼12時半、隊員を乗せたバスが大槌町を出発、はじめは元気な声が聞こえていた車内もしばらくすると、皆黙ってしまった。疲れた体、それ以上に疲れた心、隊員それぞれの想い。深い溜め息を何度もついてしまう。被災地で固く結ばれた隊員の絆。「隊員」と聞くとカッコよく聞こえるが、地元に戻れば普通の公務員で、スーツを着たり、作業着を着たり、私の場合は図書館の青いエプロン着て通常業務に戻る。しかし今回に関しては、前代未聞の惨劇が起こってしまった被災地への派遣。任務を終えた私たちはまさに「隊員」であった、と思っている。

静岡へ向かうバス、12時間かけての移動。東北自動車道は制限速度80km/時、震災の影響で路面状況が悪く揺れるバス、岩手県を過ぎて宮城県へ入ろうとする頃だろうか、ジャンパーを被って、顔を隠して、私はまた泣いてしまった、本当にカッコ悪い男だ。

県の配慮によりJR沼津駅経由、県庁着の行程となった。仮眠後、翌早朝5時、JR沼津駅北口に到着。私を含む4名の隊員が下車。皆がバスから降りてくれた。私たち4名のために解散式を行ってくれた。感動のあまりよく覚えていないが、隊長から「第8陣隊員4名、任務お疲れ様でした。私たちが被災地で行ってきた支援は小さいことだったかもしれないが、被災地のためになったと信じている。家に帰ってゆっくり体を休めてください。」と労いの言葉を頂いた。隊員から送られる大きな拍手。仲間の隊員の顔が見える、仲間の隊員が握手をしに近づいてきてくれる。

義援金申請の順番を待つ被災者の顔、大槌町役場町民課の山岡さん、山下さんの顔、たくさんの顔が目に見え、私たちが4名は「ありがとうございます」と言って、正面に深い一礼。拍手を送ってくれた隊員へ左右に深い一礼をした。再び最終目的地、県庁へ向けて動き出したバスを、手を振って見送った。

これをもって、私の任務は本当に終了した。

冷静かつ客観的に、今回の任務を通じて思ったことは、「非常時こそ本当の行政能力が試される」「想定はあくまで想定にすぎない」、「行政経験豊富なリーダー的存在の職員を失った行政機関は致命的なダメージを受けてしまうので、リーダー不在時の想定が必要」、そして「明日は我が身、我が故郷」、の4点です。

役場を失い、多くのリーダー的職員を多数失った大槌町の復旧のスピードは遅く、生き残った役場の職員もまだ気持ちを切りかえられずにいます。無理もありません、自らも被災者で被災者で避難所生活なので。「震災から2ヶ月経っていますが、まだ私、震災直後の時と気持ち同じなんです」と言われる方もいました。町長をはじめ、多くの職員を失った大槌町は、再開させなくてはならない業務が山積していますが、今なお手探り状態です。また、生き残った役場の職員は疲れきっております。ある課長さんは連絡事項を朝礼で話すにも力を搾り出して話されている状態で、話終えた後は毎回深い溜め息をつかれておりました。細く痩せこけた頬、お倒れにならないか…。役場職員の方々の心身の健康状態が心配です。職員の方々の負担を軽減させる長期的支援が必要であり、急務となっているのが「行政機能の正常化」であります。そのために必要で重要になってくるのが、まさに「行政（力）支援」であると思います。

私は入所15年目、直接市民と接する窓口、現場育ちで、持っているスキルは「接客」が唯一のスキルかもしれません。第8陣隊ではこの接客のスキルで十分に支援ニーズがありました。今も日々被災地の支援ニーズが変わっている状況で、専門的な業務を経験した職員の派遣も今後増えてくるのではないかと思います。そしてたとえ1人でも長期間派遣（3ヶ月、半年間、1年間）の形で支援できるとよいのではないかと思います。被災地の役場にとっては、実施まで長期間を有する業務を派遣職員に任ずることができることで、その分、町職員を別の仕事へシフトすることが出来ると思います。また、派遣した自治体にとっては将来の非常時に対応できるスキルと精神力を有した人的財産をえることができると思います。

最後になりますが、私が今回の任務で常に心に思っていたことは、「支援させて頂いている」の気持ちです。「支援してあげている」などと思ったことは一瞬たりともありませんでした。それが自ら手を挙げ、代表として派遣命令を頂いた使命の結果です。

帰静して後悔していることが一つあります。声をかけてくださった大槌町の皆さん、役場の職員の皆さんに「頑張ってください」という言葉をかけてしまっていたことです。「もう十分頑張っているのに、これ以上どう頑張れというんだ！」と思っていたことと思います。もしお掛けする言葉があるとなれば、体や心を気遣う言葉であったのではないかと反省しております。

私の任務は些細なものではありましたが、どんな些細な任務も心を込めて全力で取り組ませて頂きました。わたくし自ら派遣を希望し、選択した任務です。無駄な仕事など何一つないと自分を納得させております。正直いって、私の心の少しを大槌町に置いて来てしまったようで、背中に何かを背負

ってきてしまった感じがしています。帰静して日が経つにつれ増していく大槌町への想い、言葉ではなかなか表現できませんが、「全力」と前述しておきながら、ほんとうに全力を発揮できたのかという自問自答する毎日です。でも、気持ちを沼津市役所モードにしっかり切り替えてこそ、本当の意味で派遣任務終了となると思っています。被災地で経験させて頂いたことは一生涯忘れることはできませんし、忘れてはいけないと思っています。この経験を今後の私の市役所業務に活かしていきたいです。派遣業務が今後も継続されると聞いて、本当にうれしいです。

「金子、もう一度岩手へ行けるか」と問われましたら「行かせて下さい」と私は必ず言います。